

2022 年度 私立大学図書館協会 海外派遣研修
モーテンソンセンター・アソシエイツプログラムおよび
米国図書館協会(ALA)年次大会 参加報告書

2022 年 9 月

法政大学図書館事務部市ヶ谷事務課
有川博隆

本報告書の構成

1 はじめに	3
2 参加動機・目的	3
3 プログラムの概要	3
4 研修内容	5
(1) 米国での公共・学術図書館でのマネジメントを学び、担当業務の改善に繋げる	5
(a) DiSC アセスメント	5
(2) 誰もが快適に学習・研究できる環境を本学図書館でも提供する	6
(a) 図書館への IT 技術の導入	6
(b) Action Plan	9
(3) 世界の各国の地域からの参加者と情報交換をすることで、世界の図書館の動向を知り、利用者に寄り添ったサービスをいかにして届けるべきか考える	9
(a) ライブラリーバディ制度	9
(b) 利用者のニーズに応えるサービス	11
(c) 米国図書館協会 (ALA) 年次大会	13
(d) 研修参加者との交流	15
5 おわりに	17

1 はじめに

本報告書では、私立大学図書館協会国際図書館協力委員会の2022年度海外派遣研修(長期研修)でのイリノイ大学モーテンソンセンター・アソシエイツプログラムおよび米国図書館協会(ALA)年次大会への参加した際の内容を報告する。

・イリノイ大学モーテンソンセンター・アソシエイツプログラム

期 間:2022年5月25日～6月21日

開催地:イリノイ大学モーテンソンセンター

・米国図書館協会(ALA)年次大会

期 間:2022年6月23日～6月28日

開催地:ウォルター E ワシントン コンベンション センター

2 参加動機・目的

図書館で働き始めてすぐに私立大学図書館協会からのお知らせにより、海外研修の存在を知った。そして、図書館での勤務が2年を迎える頃に、上長より研修募集の案内を教えてくださいましたのが、応募するきっかけとなった。新型コロナウイルスの感染拡大状況により、今後の状況を把握することが難しく、不安であったが、日本では経験のできない貴重な機会と考え、応募に至った。

研修への応募にあたり、以下3点の目的を設定して、プログラムへ参加した。

- (1) 米国での公共・学術図書館でのマネジメントを学び、担当業務の改善に繋げる
- (2) 誰もが快適に学習・研究できる環境を本学図書館でも提供する
- (3) 世界の各国の地域からの参加者と情報交換をすることで、世界の図書館の動向を知り、利用者へ寄り添ったサービスをいかにして届けるべきか考える

3 プログラムの概要

イリノイ大学モーテンソンセンター・アソシエイツプログラム¹は、1991年に設立された図書館員のための研修センターである。これまでに90以上の国と地域から1,300人以上の修了者を輩出している。ミッションとして、「国際教育、国際理解、国際平和を推進するために、世界中の図書館と図書館員の国際的な結びつきを強化すること。」を掲げており、Clara M. Chu氏(Director and Mortenson Distinguished Professor)を中心に、Amani Ayad氏(Diversity and

¹ Mortenson Center Associates Program

<https://www.library.illinois.edu/mortenson/associates/>

Community Engagement Specialist)、Barbara J. Ford 氏 (Mortenson Distinguished Professor Emerita) および Katie Ebeling 氏 (Office Support Specialist) の 4 人で運営されている。今年度のスローガンは「スマートかつもっとスマートに: 図書館におけるリーダーシップとイノベーション」とされ、主に以下の内容が取り上げられた。

- (1) Innovation by Design
- (2) Leadership, Communication and Managing Change
- (3) Smarter Strategies
- (4) Emerging Technologies and AI
- (5) Digital and Print Collections and Repositories
- (6) Marketing and Advocacy
- (7) International Professional Networking



研修参加者の集合写真

また、今年度集まった参加者 10 名の出身および所属機関は、以下の通りである。

- (1) オマーン (The Research Council)
- (2) ガーナ (University for Development Studies Library)
- (3) 韓国 (National Library of Korea)
- (4) 韓国 (Seoul National University)
- (5) クウェート (Kuwait University)
- (6) 日本 (慶應義塾大学)
- (7) 日本 (法政大学)
- (8) パキスタン (Forman Christian College)
- (9) 南アフリカ (St Andrew's College)
- (10) 南アフリカ (Stellenbosch University)

4 研修内容

具体的にプログラムの進め方として、3種類の形式(1. 研修、2. 講義、3. 図書館視察)で研修は進められた。本報告書では、プログラムの参加目的に沿って、研修内容を紹介する。

(1) 米国での公共・学術図書館でのマネジメントを学び、担当業務の改善に繋げる

(a) DiSC アセスメント

DiSC アセスメントとは、職場でのコミュニケーションを円滑に進めるための診断テストである。その診断テストでは、いくつかの質問項目に答え、自分の行動や思考パターンを以下の大きく4種類に分類した。そして、自分と異なる種類の人とどのように関わるべきかを分析した。

一般的に図書館員に多いタイプは、Cスタイル(Conscientiousness:慎重)が多いとの説明があり、実際に研修参加者の診断結果を見ても図書館員にCスタイルが多い傾向がわかる。

○特徴

- D (Dominance) :主導(1人:オマーン人)
 - ・長所:チャレンジ精神があるため、行動力があり、結果をすぐに求める。
 - ・短所:苛立つことが多く、周囲への配慮ができず、人の気持ちを理解しづらい。
- i (influence) :感化(1人:南アフリカ人)
 - ・長所:周囲との連携やチームの意見を重視し、短時間での課題解決を好み、明るい性格を持つ。
 - ・短所:熟慮せず突然行動するため、遂行するのが難しい。
- S (Steadiness) :安定(2人:韓国人、日本人)
 - ・長所:周囲との関わりやチームをサポートすることを重視し、安定を好む。
 - ・短所:親切すぎてしまうことや変化を厭うため、決断力がない。
- C (Conscientiousness) :慎重(6人:ガーナ人、韓国人、クウェート人、パキスタン人、日本人、南アフリカ人)
 - ・長所:正確性を重視するため、論理的かつ分析を好み、完璧主義な性格を持つ。
 - ・短所:決断するまでに多くの時間を必要とする。

私の診断は、CSスタイル(Cスタイル寄りのCとSが混ざったスタイル)であった。Dとiの要素も含まれているため、極端なCSスタイルではなく、D、i、S、Cのすべての要素が含まれているとの診断内容であった。

この研修では、自分自身を無理やり他のスタイルへ変える必要はないと強調された。なぜなら、自分自身の良さを活かすことが最も重要であり、全員が同じスタイルではチームとして連携が難しく、組織が成り立たないためである。組織でコミュニケーションを取る際には、自分と異なるスタイルの人との関わり方を工夫すると業務が円滑に進みやすいとされる。例えば、Cスタイルの人が真逆タイプのiスタイルの人と関わる際には、主に以下のことを意識すると組織が活性化しやすいとのことだ。

・連携を要する場合

- ①組織連携の価値に関心を持つ
- ②楽観的で活発的な性格を尊重する
- ③ポジティブな考え方に焦点を当てる

・問題解決をする場合

- ①創造的な解決策を受け入れる
- ②エネルギッシュな性格に焦点を当てる
- ③相手のアイデアをすぐに否定するのを避ける

・意見が異なる場合

- ①論理的な解決方法を提案する
- ②意見が異なることは長期的に良い結果や関係性になることを伝える

業務を進める際には、一人だけでなく、チームで動くことが多いのではないかと思う。ひとりひとり異なる意見を持っているので、必ず自分の思い通りのやり方や結果になるとは言い切れない。しかし、このDiSCアセスメントを通して、他人を変えることは非常に難しいが、その人との関わり方を意識するだけで業務が円滑に進むことを再認識することができた。また、各個人の長所を最大限に活かし、苦手な部分を互いに補い合うことができるよう、人との関わり方を工夫することが重要だと改めて気づくことができた。

(2) 誰もが快適に学習・研究できる環境を本学図書館でも提供する

(a) 図書館へのIT技術の導入

Center for Innovation in Teaching & Learning² (CITL)は、最先端のIT技術を用いて、学習・研修効果を向上させる取り組みを実施しているスペースである。このような施設を一

² Center for Innovation in Teaching & Learning

一般的にはメーカースペースと呼び、3D プリンター、レーザーカッター、3D スキャナー、ドローン、AR、VR、テレビゲーム等の最新のテクノロジーが揃っている。また別室には、インストラクタースタジオという録画やライブ中継ができる撮影スペースも完備している。これらの機器は、決められた時間内であれば、無料で自由に利用が可能だ。この最新技術が集まるメーカースペースは学術図書館だけでなく、規模が小さい公共図書館にも設置されていることが多く、日本ではあまり見かけない施設がアメリカでは一般的に普及していることに驚いた。アメリカでメーカースペースが浸透した背景を考えると、娯楽に対する考え方が文化によって異なるのではないかと考えた。漫画は日本を代表する文化であるにもかかわらず、日本の学術図書館では広範囲で取り扱っていることが少ないのが現実である。また、同じく日本を代表するコンテンツであるテレビゲームやアニメ(DVD や Blu-ray)に至っては、設置や所蔵している図書館を見つけるのが難しいのではないと思う。しかし、アメリカでは、そのような娯楽は学習・研究のタブーとして扱わず、クリエイティブなアイデアを育てる道具と考え、多くの学術図書館や公共図書館では力を入れている。



3D プリンター



レーザーカッター



インストラクタースタジオ



VR

イリノイ大学の他施設でも、テクノロジーによって利用者が効率よく学習に集中できる環境を備えていることが多い。例えば、天井から吊るされた小型マイク (Siebel Center for Design³) や騒音が気にならなくなるホワイトノイズマシン (School of Information Sciences⁴)、個室学習室のオンライン予約管理 (School of Information Sciences)、Bluetooth でスマートフォンやパソコンの画面を共有できるディスプレイ (Campus Instructional Facility⁵) 等の機器が備わっている。

シカゴ大学図書館⁶では、自動書庫が導入されているため、利用者が資料を取り寄せてから平均 3 分程で受け渡しが可能である。書庫では、バーコードで管理された 350 万冊の資料が 24,000 の箱の中に収納され、どの箱のどの位置に保管されているかすべて把握されている。利用者は閉架書庫に降りてブラウジングはできないが、図書館のオンラインカタログから希望する資料を請求することが可能だ。利用者からの取り寄せ申し込みがあった場合、対象資料が収納された箱をロボットクレーンがを見つけ出し、1 階のカウンター

³ Siebel Center for Design
<https://designcenter.illinois.edu/>

⁴ School of Information Sciences
<https://ischool.illinois.edu/>

⁵ Campus Instructional Facility
<https://cif.illinois.edu/>

⁶ The University of Chicago Library
<https://www.lib.uchicago.edu/>

まで運ぶ。そして、カウンタースタッフがその箱から対象の資料を取った後に、箱を書架へ戻すという流れになっている。箱の中の限られたスペースを有効活用するために、請求記号順に収納するのではなく、資料サイズごとに収納する仕組みを採用している。



閉架書庫内



資料が収納されている箱を運ぶロボットクレーン
(黄色)

(b) Action Plan

Action Plan では、モートンソンセンター・アソシエイツプログラムで学んだことをもとに、帰国後、所属する図書館で企画の立案と実施に至るまでの計画を作成した。私は、創造力を向上させるためにアメリカのほとんどの図書館にメーカースペースが設置されていることを目の当たりにしたため、本学にもメーカースペースの導入の一步として、3D プリンターの導入から運用までの企画を発表した。

(3) 世界の各国の地域からの参加者と情報交換をすることで、世界の図書館の動向を知り、利用者に寄り添ったサービスをいかにして届けるべきか考える

(a) ライブラリーバディ制度

プログラム中にライブラリーバディーという現地の図書館員と2人1組のペアになって交流できる機会が設けられていた。私のライブラリーバディーである Scott Schwartz 氏は、アーキビストとして The Sousa Archives and Center for American Music⁷で働いている。初日に顔合わせした日とは別日に、彼のご厚意により、職場を見せていただいた。このセンターでは、アメリカ音楽の歴史と文化に関わる歴史的資料を様々なメディア形式で保存している。具体的に代表的な所蔵資料として、Sal-Mar Construction(電子楽器)、蓄音機や、ハーモニックトーンジェネレーター(電子回路を用いて音やリズムをつくる楽器)等を所蔵している。そして、楽器が完備されたスタジオではリハーサルやレコーディングが可能であり、楽器だけでなくマーチングバンドのユニフォームも保管している。

日本では、音楽全般の資料を保管している図書館は少ないかと思う。なぜなら、楽器や音楽メディア等の保管では、図書館とは切り離され博物館が管轄になっていると感じるからだ。一方、イリノイ大学では、このセンターを大学図書館の一部としているため、音楽関係の資料を収集しており、学外の学術研究や教育活動に多く関与していることが新鮮であった。

顔合わせのランチ以降は、一度もライブラリーバディーと交流しない参加者もいる中、アーティストでもある Scott 氏とジャズのライブ演奏を鑑賞しに出かけたりしてコミュニケーションを取っていた。親密な関係を築けたのは、彼のホスピタリティのおかげである。



レコーディング可能な演奏スタジオ



蓄音機(実際に触って、音楽を鳴らすことが可能)

⁷ The Sousa Archives and Center for American Music
<https://www.library.illinois.edu/sousa/>

(b) 利用者のニーズに応えるサービス

Urbana Free Library⁸では、図書資料の貸出だけでなく、利用者のニーズを汲み取ったサービスを提供している。この図書館は、1874年に設立され、Urbana市に位置する歴史のある公共図書館である。ここでの独自の取り組みは、地域住民が必要とするものも貸出をしている。例として、望遠鏡や、ギター、ミシン、GoProカメラ(防水設計された小型軽量のアクションカメラ)、Chromebooks、VHS変換器も貸出を行っている。また、地域住民の交流を狙い、館内の一面にSeed Exchange(種子交換所)の場所を設けている。棚から種の袋を持ち帰り、それを種から育て、収穫した種の一部を同じ棚へ返却するという内容のサービスも提供している。そして、多くの子ども利用者がテレビゲームやパソコンでのオンラインゲームで楽しんでいる光景は、日本の公共図書館との大きな違いに感じた。ゲームの場が子どもたちにとっての交流場となっていることも伺った。

Westerville Public Library⁹では、ドライブスルーでの貸出サービスを行っている。図書館内に入らずに予約資料を受け取ることができるため、時間がない人にはお勧めのサービスだ。また、自宅や学校への無料宅配サービスも提供しているため、宅配専用の自動車を所有している。そして、図書館員の業務削減という観点では、資料の自動返却の機械を導入している。返却された資料は資料タグで選別され、書架へ返却しやすいように分類される仕組みになっている。

その他にもイリノイ州立図書館¹⁰では、デジタルトーキングブック(オーディオブック)や点字資料を統括しており、視覚障害の方へのサービスに注力している。そのサービスでは、84,000以上のコレクションを揃えており、音声再生機も無料で受け取ることができる。例えば、イリノイ大学の学生がトーキングブックを取り寄せた場合、イリノイ州立図書館から現物貸借での提供を受けることが多いとのことだ。実際に、図書館の作業場を見学すると、スタッフが返却されたトーキングブックをひとつひとつ清掃をしている様子を見ることができ、膨大な数の資料が返却されていた。

また、近隣にAmish country(アーミッシュの町)があるArthur Public Library¹¹では、アーミッシュ(農耕や牧畜をして電気を使わず自給自足の生活をしているキリスト教集団)のための特別対応を行っている。例えば、館内設置のパソコンで資料検索やインターネットサ

⁸ The Urbana Free Library

<https://urbanafreelibrary.org/>

⁹ The Westerville Public Library

<https://westervillelibrary.org/>

¹⁰ The Illinois State Library

<https://www.ilsos.gov/departments/library/>

¹¹ The Arthur Public Library

<https://www.arthurlibrary.org/>

ーフインをする場合、パソコンスキルが十分ではないため、スタッフが付きっきりで使い方のサポートをしているようだ。このようにホスピタリティ溢れるスタッフの対応により、すべての人にとって図書館は知の情報拠点になっている。

シカゴ公共図書館¹²の最上階には、Winter Garden と呼ばれるガラスの屋根が特徴的な空間で勉強やディスカッション、ミーティングができる場がある。その美しい空間は、学習・研究以外の利用目的として、プライベートイベント(結婚披露宴や企業イベント等)で利用されることがあると伺った。

アメリカの図書館を視察してわかったことは、独自のサービスを展開している図書館が多いことだ。図書館が位置する地域の情勢や特徴により、図書館自身の役割を理解して、図書の貸出以外のサービスを行っている。私が所属する法政大学図書館でも利用者のニーズを汲み取り、法政大学だからこそできる特徴のあるサービスを提供できれば、特色が出て話題にも上がり、大学としても強みになるかと感じる。

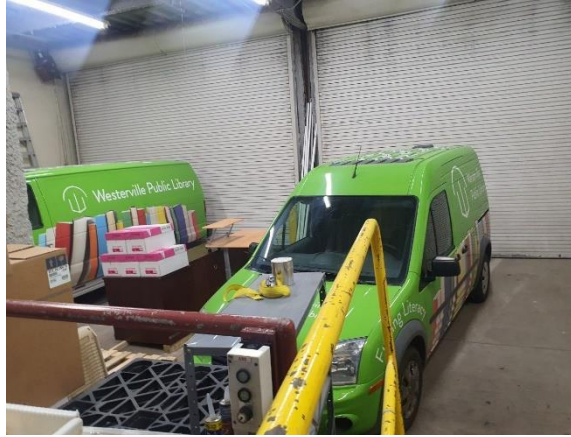


望遠鏡やギター等の貸出品
(Urbana Free Library)

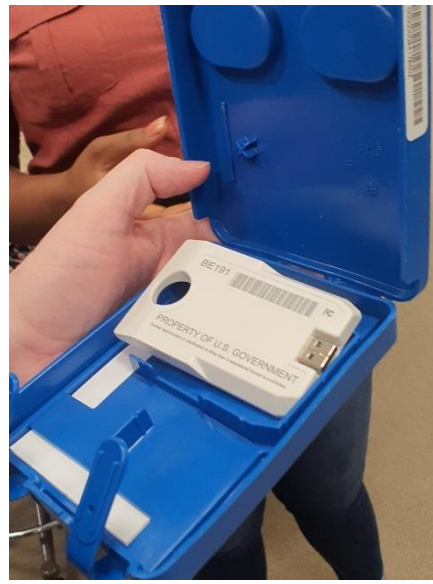


Seed Exchange
(Urbana Free Library)

¹² The Chicago Public Library
<https://www.chipublib.org/>



宅配専用の自動車
(Westerville Public Library)



デジタルトーキングブック
(イリノイ州立図書館)

(c) 米国図書館協会 (ALA) 年次大会

モーテンソンセンター・アソシエイツプログラムが終了後、6月23日～6月28日の期間にワシントン D.C. で開催された米国図書館協会 (ALA) 年次大会¹³に参加した。メインの会場は、ウォルター E ワシントンコンベンションセンターであり、隣接するホテルやアメリカ議会図書館を会場とするセッションもあった。イメージとしては、日本の図書館総合展をインターナショナルにしたものを想像すればわかりやすいのではないかと思う。講演や展示、ポスターセッション、映画放映に加え、著者が自著にサインして無料配布しているブース、軽食、アルコールが無料提供される光景などが新鮮であった。

「ALA President's Program: Advancing the Asian American and Pacific Islander (AAP) Story: A Conversation with Publishers, Literacy, Advocates, and Storytellers」での出来事を紹介する。アジア系アメリカ人初の米国図書館協会会長である Patricia “Patty” Wong 氏は、市立図書館司書であり、サンノゼ州立大学の教員であり、過去には学術図書館や児童図書館、専門図書館で働いた経歴を持つ。その彼女は4人のアジア系アメリカ人 (Jane Park 氏: 戦略家およびセサミワークショップの元ディレクター、Linda Sue Park 氏: 作家、Philip Lee 氏: 出版者、Christina Soontornvat 氏: 作家) との対談を行った。視聴者 (イ

¹³ 2022 ALA Annual Conference & Exhibition
<https://2022.alaannual.org/>

ンド系アメリカ人)からの意見で、“本やテレビといったマスメディアが、アジア人と言えば CJK (Chinese, Japanese, Korean) の東アジア人を表現するため、南アジアや中央アジア、西アジアの人を誰も想像しない”と発言していたことが印象に残っている。確かにメディアの影響でアジア人は東アジア人を指すことが多いため、東アジア人以外のアジア人は疎外感を感じてしまっているのではないかと思った。つまり、この対談も“Asian American”とタイトルに入っているが、講演者は協会長を含め中国系アメリカ人、香港系アメリカ人、韓国系アメリカ人等であり、南アジアや中央アジア、西アジアのバックグラウンドを持つ講演者ではない。そのため、視聴者は、情報を発信する仕事に就く講演者へ CJK 以外のアジア人にも注目してほしいという意味も含めての発言だったのではないかと考える。



ALA 年次大会展示会場



A Conversation with Publishers, Literacy, Advocates, and Storytellers

また、ALA 年次大会のセッションで出会った方がアメリカ議会図書館¹⁴の Asian Reading Room を見学する予定だと会話の中で知った。そこで、無理なお願いをして担当者へ連絡を取ってもらい、予約を取るのが非常に困難なツアーに幸運にも同行できるようになった。この閲覧室では、400 万点以上の資料を所蔵しており、誰でも自由に利用できるよう開放している。中国語、日本語、韓国語、チベット語、ヒンドゥー語などの約 200 の言語(方言も含む)の資料が配置されている。また、この閲覧室でなら多言語のレファレンスコレクションを閲覧でき、アジア研究のデータベースや著作権保護されているデジタル資料にアクセス可能とのことだ。アジアの国と地域・人々に関するアジア学に豊富な知識を持つ図書館員が利用者の求める情報へ導けるよう対応できることが強みである。

¹⁴ The Library of Congress

<https://www.loc.gov/>



Asian Reading Room

(d) 研修参加者との交流

St Andrew's College (南アフリカ)からの参加者と交流している中で Extreme Reading Competition¹⁵と呼ばれる面白い図書館企画があることを知った。このイベントは、SNSでのハッシュタグ機能を使用して、過酷な状況の中で読書をしている姿の写真を投稿して、勝者を決める大会のことである。過去には、ウェイクボード中に読書をしている人の写真や水中での読書姿の写真等が集まったとのことで、日本では見ることの少ないイベントである。優勝者には、iPad やギフト券などの賞品が贈呈されるので、非常に盛り上がる目玉企画になっているとのことだ。図書館に馴染みがない利用者にも来館するきっかけになるため、図書館の利用促進活動として興味を惹かれるイベントである。

¹⁵ Extreme Reading Winners (St Andrew's College)

<https://www.sacschool.com/2021/03/31/extreme-reading-winners-2/>

<https://www.sacschool.com/2019/03/26/congrats-to-the-extreme-reading-competition-winners/>



Extreme Reading Competition 優勝者の写真 (St Andrew's College HP より)

以下、研修中に視察した図書館は以下の通りである。

【大学図書館】

- The University of Illinois Library
- The University of Chicago Library
- The Ohio State University Thompson Library

【公共図書館】

- The Urbana Free Library
- The Harold Washington Library
- The Pritzker Military Museum and Library
- The Westerville Public Library
- The Arthur Public Library
- The Abraham Lincoln Presidential Library and Museum
- The Illinois State Library

【図書館関係施設】

- OCLC (The Online Computer Library Center)

5 おわりに

海外研修に参加し学んだことは今後のキャリアにおいて、非常に貴重な経験ができたと感じる。友人から“アメリカ人は意思決定が早く、仕事が効率的で早い”と聞いていたため、直接的にその様子を見ることができたことは、自分自身の業務を進めるにあたって、非常に参考になることが多かった。アメリカで多くの図書館を視察したが、やはり最新のサービスや機器が導入されていることが多かった。その背景として、新しい物事を導入しやすい風土があるため、最新の物事を導入するハードルが日本よりも容易と考えた。しかし、アメリカのすべてが良いというわけではない。日本にいと当たり前になってしまうが、対人のサービス面では日本の図書館の良さを改めて再認識できる機会にもなった。この研修では、学生時代に留学や海外インターンシップをした経験と同じくらい、実りのある時間を過ごすことができたと感じる。

研修参加者とは長期間団体行動を共にしたため、お互いを助け合おうとする仲間意識が強く、チームのような存在であった。特に、行動を一緒にすることが多かったガーナ人、韓国人、南アフリカ人の参加者と親しい関係を築けたのも嬉しく思う。また、本来であれば日本からの参加者は1人であるが、新型コロナウイルスの感染状況により延期した影響で、今回日本から一緒に参加した慶應義塾大学の長坂様に出会えたことも非常に嬉しい。今後も出会うことができた方々とのコネクションを大切にしていきたい。

※謝辞

本研修に参加するにあたり、多くの方にサポートしていただいたおかげで、充実した時間にすることができました。イリノイ大学モーテンソンセンターの皆様、モーテンソンセンターとの調整をくださった私立大学図書館協会(同志社大学)の伊藤様、山口様、研修参加にあたり手厚くサポートをくださった法政大学図書館事務部の皆様、本当にありがとうございました。今回の研修で学んだことをアウトプットしていき、少しでも図書館が発展できるように寄与したいと考えています。心より感謝申し上げます。